



研究論文 (Articles)

開業助産師の経験からみるケアの特徴¹⁾

—語りからの現象学的考察—

西堀 幸子

(大阪市立大学大学院看護学研究科後期博士課程)

Characteristics of the care from the experience of a midwife
who works in a Maternity Center which a midwife operate
—Consideration of phenomenology from the narrative of
midwife who works in a maternity center—

NISHIBORI Sachiko

(Doctoral Course, Osaka City University Graduate School of Nursing)

Throughout my description of the experiences of a midwife who works in a maternity center, I explore the ways midwives look at and think of caring for women from pregnancy until childbirth study how she is involved in her practice. I also considered characteristics of the care, based on the phenomenology.

I interviewed a midwife who works in a maternity center, and described and studied the experiences of midwife, based on the phenomenology of Maurice Merleau-Ponty ; I made the description taking her points of view into consideration. Through these descriptions, I concluded the characteristics of the care by examining the experiences of the midwife.

I paid attention to the typical content where the midwife talked about the ways of practice throughout the interview and described it under the following two themes. The first theme is “talk with a fetus” and I described the care with palpation that was provided for the good of the fetus. Palpation is very critical because the midwife can get to know “the feelings of the fetus.” In this category, I described in detail the “reaction of the fetus,” “care of a breech baby,” and “understanding the feelings of the fetus.” The second theme is “the subject delivery of the woman in labor.” I described pregnant woman and fetus-oriented care through the process from pregnancy to labor. For having a woman in labor give birth, the midwife focuses on “facilitating circumstances” where woman can concentrate on giving birth on her own without difficulties. In this category, “checking the health of the pregnant woman using the hands of a midwife,” “assistance with delivery by a woman in labor under an extreme situation” and “In like a cat in the corner” were described in detail.

Through these descriptions, I derived characteristics of the care from the midwife who works in a maternity center. The first feature is that it should not be the one-side care by the midwife. She cares for a pregnant woman or a woman in labor and her fetus by considering their circumstances and making use of her experiences. The second feature is that she can “touch and feel” the baby so well that she can grasp both circumstances and feelings of the mother and the fetus in order for proper care to be delivered. The third feature is that she keeps accumulating experiences through everyday care, which results in continuously updating the methodologies of the care.

Key Words : midwife, maternity center, experience, narrative, care Phenomenology

1) 本研究は立命館大学大学院応用人間科学研究科修士課程に提出した修士論文の一部に加筆し、修正を加えたものである。また、第51回日本母性衛生学会学術集會に発表したものである。

I. 緒言

元来産婆は、妊婦・産婦・褥婦の身体が発する変化を、産婆自身の身体で感じケアを行っていた。しかし、医学の目覚ましい進歩により、医療技術・医療機器が多様に用いられるようになり、医療が不必要にお産に介入したことにより、ケアは大きく変わっていった。お産に不必要に医療が介入したことにより、助産師自身が、妊婦・産婦・褥婦の生活世界よりも、医療といった自然科学的思考を重要視して妊婦・産婦・褥婦を理解するようになったことは否めない。

このような現状の中、助産師と妊産婦の関係は希薄になり、病院での出産経験者は機械的で事務的なスタッフとの関係に不満を感じるようになる（伊賀2004）。そして“安全性”を追い求めて介入してきた医療の中でのお産に対して批判の声が上がる（グループ・きりん1997）。

厚生労働省の「健やか親子21」では、母子保健に関する主要課題に「妊娠・出産に関する安全性と快適さの確保と不妊への支援」、「子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減」などが挙げられている。これらの課題に対しては、母親が満足 of いく出産を体験し、育児を楽しめるように、母親やその家族のあるがままを受け入れ寄り添い、妊娠期から育児期までを継続してケアを行うことが求められる。助産院では妊婦・産婦・褥婦の生活世界を理解し継続したケアを行っており、正常な妊娠期・分娩期・産褥期のケアを行うことに徹している開業助産師の秀でたケアの技術を探求することは必要であると考えられる。

助産院に関する先行研究では、助産院で出産をした女性は、病院で出産をした女性と比べて出産に対する満足度が高いとされている（志村2005；毛利2007；竹原・野口・嶋根・三砂2008）。また、助産院では、豊かな出産体験をしており（竹原他2008前出）、豊かな出産は、その後の育児に影響し、子どもへの愛着が高まるとし（三砂・竹原2009；長谷川・村上2005）、豊かな出産体験ができるには、不要な医療介入はしないこと、快適で安心できる環境、産婦が主体的に取り組めること（三砂他2009前出）、

医療従事者との信頼関係の構築（竹原・野口・嶋根・三砂2009）が必要であるとしている。

先行研究においては、助産院のケアについて様々な視点から探求されているが、それらは、助産師のケアが量的に分析されていたり、その場面のみの部分的な視点のみに注目されている。文脈を大切にしたり、ある実践の全体性から、助産師のものの見方・考え方、妊婦・産婦・褥婦やその家族との関わりについての助産師の経験を探求したものはあまり見られない。そこで本研究では、開業助産師の経験の記述を通して、助産師のものの見方・考え方がどのように生み出され、また、それがどのように実践の中へ編み込まれていくのかを探求し、助産師の経験から現象学的思想を基に、助産院でのケアの特徴を検討する。

助産院でのケアの特徴を探求することは、ルーチン化された医療の中で働く助産師が自身のケアを振り返り、自然科学的思考の枠組みの中で行っているケアのあり方を問い直す一つの契機になると考える。そのことは、多くの女性が満足 of いく分娩を行うことができるケアのあり方の一つになり、ケアの向上や助産師自身のやりがいにつながるのではないかと考える。

II. 研究方法

1. 研究デザイン

Merleau-Ponty の現象学的思想にもとづく質的記述的研究である。

「本質を存在へとつれ戻す哲学でもあり、人間と世界とはその＜事実性＞から出発するのでなければ了解できないものだ、と考える（Merleau-Ponty 1967a）」現象学 of 思想は、助産院のケアを助産師の経験の中から探究する事へ導いてくれる。さらに Merleau-Ponty は、「記述することが問題であって、説明したり、分析したりすることは問題ではない（Merleau-Ponty 1967a）」とし、「まず、私の視界から、つまり世界経験から出発して私はそれを知るのであって・・・（Merleau-Ponty 1967a）」と述べている。また、記述的現象学的研究は、探究する現象について、あらかじめもちうるすべての信念や意見

をみきわめ、それらをいったん判断停止することが必要となる。それらが完全になされることはないが、研究者は世界やすべての前提を可能なかぎり保留にして目の前のデータと純粹に向き合うことが求められる（ポーリット・ベック 2010）。それゆえ助産師の経験の探究においては、開業助産師の視点に立ち、助産師の語られた経験に忠実に、その経験がいかに成り立っているかを記述し、その記述を通して経験しているけれども自覚していなかった経験を見ているとき、助産師の経験からケアの特徴を検討した。

2. 調査時期

2009年8月

3. データ収集方法

開業助産師に、どのように助産という実践を経験しているのかについてインタビューを行った。インタビューの時間は2時間半程度であった。場所は、研究協力者が開業している助産院で、プライバシーが確保できる場所で行い、研究協力者の了解を得てICレコーダーを設定し、録音をしながらインタビューを行った。インタビューは、助産師となった理由、助産院で働くことになった理由、助産院でのケア、印象に残っている出来事について問いかけながら、その後は助産師が、具体的な経験が自由に語れるように注意をしながら行った。

4. 分析方法

現象学を手がかりにした研究の分析方法（西村 2009）を参考に行った。分析の手順としては、ICレコーダーに録音されたインタビューの音声記録から逐語録を作成し、その逐語録を繰り返し読み、全体の印象をつかんだ。同時に読み返しながらかついたことを加え、語られている経験の内容を筆者の視点や既存の理論に基づいて分析するのではなく、経験した助産師の視点からその経験がいかに生み出されているのかを記述した。経験のまとまりに注意をして、そのまとまりが何を言おうとしているのかを語り手の視点からテーマを探り、ある経験のまとまりを詳細に読み込み記述した。記述を進めながら、全体の流れを探った。各テーマとなった経験がいかに

成り立っているかを記述すると同時に全体の流れとの関係を捉えなおした。経験がその当事者にとっていかに成り立っているのか、という点に心がけて記述を何度も読み返し、そのテーマに沿った記述となりえているか再度分析を行った。最後に、助産師のケアの特徴に焦点をあて検討した。

分析の過程では看護分野にて現象学的研究の経験が豊富であるスーパーバイザーに確認を行った。

5. 倫理的配慮

研究参加者には、研究の目的・方法について説明を行い、研究参加の任意性と個人を特定する情報の守秘を保証し、本研究の発表を行うことについて口頭と文書により研究協力の承諾を得た。また、論文完成後は研究参加者に論文を見て頂いた。

Ⅲ. 結果

1. 研究協力者の概要

本稿では、一人の開業助産師の経験の語りについて記述することとした。

D助産師は病院で数年働き、その後D助産師のお産をしてくれたお産婆さんの姿を思い出して開業された60代の助産師である。開業して20年以上になる。

2. 経験の記述

D助産師の経験の中で、実践の仕方が象徴的に語られている内容に注目し、D助産師がD助産師の手を介して、お母さんの健康状態や、赤ちゃんの健康状態と思いを感じて関わっていることについて記述していく。また、お産の時は産婦が主体となってお産ができるような関わりを行っていることについても記述していく。

1) お腹の中の赤ちゃんと話す

D助産師は、お腹の中にいる赤ちゃんとさまざまな形で交流したことを語ってくれた。D助産師が見ていたり、語っているのは妊婦・産婦だけでなく赤ちゃんでもあるということ語りから記述していく。記述を通して、助産師がどのように妊婦・産婦、赤ちゃんを見ているかを確認していくことにする。

(1) 赤ちゃんの思いと反応

冷えた身体を温め、食事の内容を変えることによってどんどん温かくなっていく妊婦のお腹の中にいる赤ちゃんについて、D助産師は次のように語る。

「赤ちゃんの触った身体の感じが、だんだん生命力にあふれてくるんですよ。反応がいいって言うか。なんとな〜くどよ〜んと元気がなかったのが、プリッしてくるんですね。声かけすると反応もあるし、すぐお尻触ってるよ〜っていうと、プリプリッて、反応してくれるし、おつむも温かくなってきたよ〜っていうと、ふうふうって動かしてくれるしね、お母さんがんばってるね、温かくなってきたでしょうって言ったら、なんか反応があるんですよ、ほわあって動いたりね、嬉しい、喜んでるって感じですね。赤ちゃんが。お母さんも喜んでるわあって。今返事しましたねって、言わはるんですよ。お母さんもそういう事を感じられる身体になっていかはるんですよ。5感,6感がね、すごくするどくなっていかがはるんです。なんか透けて見えるような感じがします。赤ちゃんが、今日は、こっちが背中ですよ、とか、今日はあぐら組んでますよ、とか、今日はぴよんと上げてると思うんですけどって、するどいお母さんはそんなふうになっていきます。(・略・)

肌で感じるっていうか、私は、触診とか視診とか聴診とかあるけど、感覚診っていうのはものすごく大事やと思ってるんです。赤ちゃんが、元気だと思えるその感覚、この赤ちゃんの身体は温かいんだあって思えるその感覚。」

D助産師はお母さんのお腹に触れることで、赤ちゃんがだんだん生命力にあふれることを感じている。赤ちゃんが「どよ〜んと元気がなかったのが」「プリッしてくる」ことで、「反応がいい」と感じ、そしてその「反応がいい」ことを、「生命力にあふれる」というふうに感じるわけである。このようにD助産師は、お母さんのお腹に触れることで、赤ちゃんの状態を感じているのだが、「赤ちゃんの触った身体の感じが」と語っていることから、D助産師は、

お母さんのお腹を触っているにもかかわらず、お腹の中にいる赤ちゃんを直接触っているような、見えているような感じを経験している。

D助産師が「お尻触ってるよ〜」と声かけすると、赤ちゃんは「プリプリッて」反応し、「おつむも温かくなってきたよ〜」という、「ふうふうって動かしてくれる」。「お母さんがんばってるね、温かくなってきたでしょう」という、「ほわあって動いたり」するように、赤ちゃんは「声かけすると反応」があるのである。ここでは、D助産師は、お腹の中にいる赤ちゃんに話しをすると、赤ちゃんは反応してくれているように感じられる経験をしている。また、その「プリプリッ」「ふうふうっ」「ほわあ」と赤ちゃんが反応したことを「嬉しい」「喜んでる」と感じ、赤ちゃんが反応してくれるといったことだけでなく、赤ちゃんの思いをも感じる経験をしている。D助産師がお腹に触るときは、赤ちゃんの大きさや温かさ、動きを見るだけではなく、赤ちゃんの「反応」や「思い」を感じようとして、触れているのである。そういった志向性によって、赤ちゃんの「プリプリ」「ほわあ」「ふうふう」と表現されるような動きが、「生命力にあふれる」「喜ぶ」「嬉しそうに」という赤ちゃんの「状態」や「思い」としてD助産師に立ち現れてくるのである。

D助産師のこういった赤ちゃんとの関わりは、お母さんの赤ちゃんに対する関わりに変化をもたらす。「お母さんも喜んでるわあって。今返事しましたねって、言わはるんですよ」と語られているように、お母さんもまた、赤ちゃんの「反応」や「思い」を感じるようになるのである。お母さんが「なんか透けて見えるような感じがします」と語られるぐらい、「お母さんもそういう事を感じられる身体になって」、5感,6感がね、すごくするどくなっていくのである。

D助産師の赤ちゃんとの関わりは、お母さんのお腹にいる赤ちゃんへの関わりであるから、お母さんは、D助産師と赤ちゃんの関わりの中にいつもいるわけである。D助産師がお母さんの身体を介して赤ちゃんと話す関わりを、お母さんは肌で、身体で感じていることになる。そして、自然と赤ちゃんの「反応」や「思い」を感じるようになっていくのである。

また、そういったことが、お母さんと赤ちゃんの関係性を深めていくのである。

(2) 赤ちゃんが治す ー逆子のケアー

D助産師は、赤ちゃんの「反応」や「思い」を感じながら逆子を治す時の様子を次のように語る。

「逆子を治して欲しくて来られますけど、私は、とにかく、お尻触らせてね、嫌だったら押し返してくれたらいいからねって言うので、押し返してくる子にはもうそれ以上しませんし、今日は初めてやから嫌なんやねえってやめるし。もし、よかったら、2、3回来てくださったら、赤ちゃんも私の声を覚えてくれているので、あ、また、同じ人が一生懸命、声かけてるし、お尻あげてもいいかなあって、思ってくれるかもしれないしねえって、言うのと、わりと、2回、3回目で逆子は治ることが多いんですよ。治すというか、赤ちゃんが治す、回ろうとするのを、ちょっと押すだけなんですよね。外回転ってというようなもんじゃないんですよ。ちょっと押してあげたら、グルンとまわって行くのでね、嫌だったら回らなくていいのよって、言っていると、ちゃんと返事してくれるので、お尻触っていい？って、大丈夫って返事してくれるので。お尻触って大丈夫っていうと、緩やかな動きがありますわ。嫌だったら、グッと押しますから、ブンブンって2回ぐらい押すときもあります。手の力なんかも特にグッと入ってますから、嫌がってる時は、触ると。そういうので、総合的に判断してますけどね。お尻上げるよ～って、いいよ～って、なんか嬉しそうに上がっていかはりますよ。上手上手、上手やね～って言ったら、ほんとに嬉しそうに回るから。」

D助産師は、赤ちゃんのお尻触りを触り、「嫌だったら押し返してくれたらいいからねって言うので、押し返してくる子には」ケアをすることはない。「お尻上げてもいいかなあって、思ってくれる」「お尻触っていい？って、大丈夫って返事してくれる」赤ちゃんに対してだけ、逆子のケアを行う。D助産師は、

赤ちゃんが「グッと押し」たり、「ブンブンって2回ぐらい押す」こと、「手の力なんかも特にグッと入って」ることを、赤ちゃんが「嫌」だと思っていると感じ、また、「穏やかな動きある」時は、赤ちゃんは「大丈夫」と思っているように感じている。ここでも、D助産師は、「お尻触って大丈夫？」というD助産師に対して、赤ちゃんが応じてくれていることと、その時の赤ちゃんの思いを感じる経験をしている。D助産師は、赤ちゃんの思いを確認し、また、その思いを尊重して赤ちゃんに関わっているのである。

「大丈夫って返事してくれる」赤ちゃんに対して、D助産師が「お尻あげるよ～って」言い、赤ちゃんが「回ろうと」するとき「ちょっと押す」と、赤ちゃんは、「いいよ～って、なんか嬉しそうに上がって」いく。そんな嬉しそうに上がっていく赤ちゃんを感じるから、D助産師は「上手上手、上手やね～」って、赤ちゃんに言うのであって、そして赤ちゃんは「グルン」と、「ほんとに嬉しそうに回る」のである。赤ちゃんが回ろうとしていることに促されて、D助産師は「お尻上げるよ～」と言い、赤ちゃんが「回ろうと」することに促されて、D助産師は「ちょっと押す」のである。D助産師は、「ちょっと押す」のだけれども、そこではむしろ赤ちゃんの反応やその動きに導かれているような感覚が起こっている。D助産師のケアは、「外回転ってというようなもんじゃなく」、赤ちゃんが回ろうと、「回ろうと」する時に、「ちょっと押して」少しお手伝いをするだけなのである。

D助産師は、逆子の赤ちゃんに対してのケアについて、「(助産師が) 治すというか、赤ちゃんが治す」と言い直している。D助産師があえて言い直していることから、確かに、D助産師が「ちょっと押す」ことで、赤ちゃんの身体の向きを治しているのも事実である。しかし同時にその時の感覚としては「なんか嬉しそうに上がっていかはりますよ」と語っていることから、むしろ赤ちゃんの方が治す、赤ちゃん自身が回って治っていくとしか言い表せないような経験としても成り立っている。

(3) 赤ちゃんの思いが分かるまで

科学的思考のもとでは、これらの語りは、D助産

師の思い込みや主観とされるかもしれない。しかし、このようなケアができるようになるまでには、10年必要であったとD助産師は語る。

「最初から分かったわけではなかったですね。丁寧に見させてもらって、もちろん赤ちゃん良く動いたはるし、温かいし、大丈夫やねえとは思ってましたけど、大きさとか見て、だけど、ほんとにしっかり返事はるんやなあとか、自分の意志を伝えてくれはるんやなあって、思ったのは、やっぱり10年越えてからですね。でも、ほんとに、手に目をつけるようにがんばって見させてもらったからかなあって。ちょっと触り過ぎよって言われるぐらい触らせてもらったりね、そんなにお腹さわって大丈夫なんですかね?って、言われたことがあるんです。大丈夫よ、はってないからって、ごめんねって。お話ししてもらってるのでね、って言って。10年必要でしたね。」

D助産師は「最初から分かったわけでは」なく、「ほんとにしっかり返事はる」「自分の意志を伝える」と思ったのは「10年越えてから」である。初めは、誰もが手で感じることでできる、赤ちゃんの大きさや、温かさ、赤ちゃんの動きだけを感じていたD助産師が「ほんとに、手に目をつけるようにがんばって見させてもらい」、「ちょっと触りすぎよって言われるぐらい」お母さんのお腹を触っていたのは、そのつど赤ちゃんから伝えられる何かを感じとっていたからではないだろうか。何も感じていなければ、「手に目をつけるようにがんばって」、「ちょっと触り過ぎよって言われるぐらい」触る必要もなく、赤ちゃんの大きさや温かさ、赤ちゃんの動きが分かればそれだけでいいはずである。それ以上にお腹を触る必要はないのである。しかし、D助産師は赤ちゃんから伝えられる何かに促されて、「手に目をつけるようにがんばって」、「ちょっと触り過ぎよって言われるぐらい」触るようになっていくのである。そして、赤ちゃんが伝えてくる何かを知ろうとするD助産師の志向性によって、「10年越えてから」その何かが、赤ちゃんの「思い」としてD助産師に現れ

てきたのである。D助産師が、赤ちゃんから伝えられる何かを感じることができたのは、「丁寧に見させてもらって」だからである。「触診とか視診とか聴診とかあるけど、感覚診っていうのはものすごく大事」として、直接身体に触れることを大事にするという思いが「丁寧に見させてもらって」という姿勢へとD助産師を導き、その姿勢があったからこそ、赤ちゃんから伝えられる何かを感じることができたのではないだろうか。

2) 産婦の主体分娩を支えるケア

D助産師は妊婦の身体を良くすることが大事であるとし、妊娠中のケアとその健康な身体の産婦のお産のケアについて語ってくれている。これらを記述することで、D助産師が妊娠中、お産中に妊婦・産婦とどのように関わっているのか、また、妊娠中のケアがその後のお産にどのように繋がっていくのかを確認していくことにする。

(1) 助産師の手から妊婦の健康状態を感じる

D助産師は、お母さんのお腹に触れた時に、赤ちゃんに声をかけると「プリッ」「プリプリッ」と反応することで、「生命力あふれる」ように感じていることから、超音波による画像診断や、分娩監視装置といった医療機器からではなく、D助産師の手を介して直接赤ちゃんの健康を感じている。そして、お母さんについても、お母さんの健康な身体から「びんびん」として、健康の状態を感じられると語る。

「身体を見せて頂いてたら、ほんとに、びんびんに健康のね、状態を感じられるんですよ。なんかどよ～んとしてらっしゃるとか、冷えてるとかね、筋肉に力がないとか、羊水が冷たいとか、子宮の緊張がちょっとおかしいとか、赤ちゃんの身体が冷たいとか、そういうのが、ないんですよ。だけど、たまに、ここに来る人で、ひどい貧血で、冷えてて、活気がなくて、何する気も起きないんですって、言ってる人の身体って、やっぱり冷たいし、羊水も冷たいし、子宮筋の状態もなんか不安定だし、変にはったり、変に力がなかったり、するのでね。」

D助産師は、お母さんのお腹に触ることで、「どよ～んとしている」「冷えてる」「筋肉に力がない」「羊水や赤ちゃんの身体が冷たい」「子宮の緊張がおかしい」という事をD助産師の手から感じられるのである。そして、そういうことがないことが、「びんびんに健康」の状態として感じられるのである。D助産師は、お母さんの身体に触れる事で、お母さんの健康の状態を感じているわけだが、ここではD助産師に、お母さんの身体自体が、健康の状態を表しているように見えてくるというような感覚が成り立っている。D助産師は、お母さんの健康状態を血や尿の検査データや、血圧や体温などの数値からだけではなく、お母さんの「びんびんに健康」の状態に触れることで、直接感じていくのである。

妊婦自身の身体と赤ちゃんの健康状態を、D助産師の手から感じるということは、D助産師が妊婦と赤ちゃんの健康を自身の身体で感じるということである。D助産師が自身の身体で健康の状態を感じているのだから、この事はD助産師にとって、何にもまして、的確に妊婦と赤ちゃんの状態を知ることができる。そしてD助産師は身体で感じた妊婦と赤ちゃんの健康を信じて、お産のケアを行っていくのである。

(2) 極限状態の人への分娩介助

D助産師は、自身の身体で感じた妊婦と赤ちゃんの健康状態を信じてお産のケアを行う時の心情を次のように語る。

「私はね、ものすごく人の好き嫌いが激しいんですよ。だから、自分の苦手な人とは絶対遊ばないし、苦手だと思ってる人とは、絶対、お茶を飲まないんです。外で。だけどね、お産になるとね、ものすごく私、いい人になれるんです。どんな人に対してもね。ある意味、命を産まはるっていう、極限状態に近いことにはるかもしれない人をね、お引き受けするわけでしょ、だから、私がいい人にならないといけないので、その時だけはね、何のふらちなこともないです。何にも頭にちらつかないですよ、不思議な事に。早く産まれて欲しいなあとか、

困ったなあとか、そういうことが一切起きないし、びっくりしました。自分でお産して。わたし、こういうところあったんやわって。すごい短気なのに。お産する人に対してはすごく善人になれるんやって思って。何もかも捧げられるんですよ。自分のしんどさなんて全然ないんですよ。何時間でも腰さすってられるし、ほんとに飲まず食わずでも付き添えるんですよ。」

ここでD助産師は、「不思議なことに」「びっくりしました」と語っている。「不思議なことに」と語っていることから、なぜそのようになるのか分からないのであり、「びっくりしました」と語っていることから、D助産師は自身の性格から考える心情とは違った心情や行動をお産中に行っていると思われる。これらのことは、D助産師側から積極的に意識してケアを行っているというより、D助産師は自覚することなく、「命を産まはるっていう極限に近いことになるかもしれない人」に引きつけられ、促されて、「すごく善人になれて」「何もかも捧げられ」「自分のしんどさなんて全然なく」「何時間でも腰をさすってられ」「飲まず食わずで付き添える」というケアが導かれていることを表している。「極限状態に近いことになるかもしれない」という存在が、D助産師のケアを導いているのである。

(3) 猫のように隅にいるケア

D助産師は妊娠中にお母さんの身体をよくすることが、お産にどのように繋がっていくかということを次のように語る。

「お産の時っていうより、妊娠中にどれだけの身体にしてあげるかってのが、助産婦としては、がんばりどころですかね。(・・略・・)やっぱ私は妊娠中がもっと大事やと思いますわ。そうしなくていい身体にしてしまうというね。吸引分娩しなくてもいい身体にしてあげるとか、体重のコントロールを上手にしてくださる手伝いをするとか。そっちの方に心血そそぐの方が大事やろなあって、思ってるので。よく、あそこの助産院はうまく産まさはるっていい

う事を聞きますけど、そうじゃないんですよ、妊娠中の管理がきちっとできてるから、うまく産まれるんですよ。妊婦健診って大事やと思いますね。絶対産む力はあるはずなので、女性は。それを助けるものをもっともっと増やしてあげればいいんですよ。ま、最終的には精神力ももちろん大事ですけど、まず、身体を良くしてあげれば、自信がつくし、そしたら自分で産めるって思えるようになるし、あとは、お産のときは、むしろ邪魔しなかったらいいですよ。(・・・略・・・) 私たち助産師がちらちらいたら、緊張しますよ。」

D助産師は、妊娠中の管理がきちんとできている産婦へのケアは、「むしろ邪魔しなかったらいいんです」と語っているが、その「むしろ邪魔しなかったらいいんです」ということはどういうことなのかを次のように語る。

「私は、猫のように隅っこの方にいとくんです。で、30分に1回ぐらい、すいません心音聞かせて下さいって、心音聞かせてもらって。ああ、居たの？みたいなね。誰か拭いて、誰かって、言っただけありますね。視界に入らないようにしてますからね。夫が目の前にいるぐらいで、私たちは視界に入らないようにしてるから。誰か～って言っただけありますわ。大抵。ご主人が手を握って離せない時にはね。誰か～腰さすって～ってね。ちょっといるの？そこに！！って。腰！！って言っただけありますよ。だから、そういうお産になったら、あ～もうしめしめって、感じですね。女王様になってねえって。言ってるので。」

「猫のように隅っこにいる」こともケアの一つなのである。産婦が「ああ居たの？」と言っていることから、D助産師が傍に居ることが産婦には、分からないということであり、「猫のように隅っこにいる」ということは、傍にいるけれども、存在感を出さないということでもある。D助産師は、「女性は絶対産む力」があり、妊娠中にその力を「もっ

ともっと増やす」ことが大事で、「お産の時はむしろ邪魔しなかったらいい」と語っている。「猫のように隅っこにいる」ケアは、邪魔をしないということなのである。「私たち助産師がちらちらいたら、緊張しますよ」と語っていることから、傍にいるけれども、存在感を出さず、そして産婦の邪魔をしない、なくてはならない空気みたいな存在になるということで、「ちらちら」することもなく、産婦が「緊張」せずにすむのである。

そしてD助産師はお産の時の心情として、「何も頭にちらつかない」とも語っている。この「何も頭にちらつか」せず傍にいるというケアは、妊娠中の健康管理がきちんとして行えて、妊婦と胎児の健康状態をD助産師が身体で感じ、「うまく産まれる」と信じているということが根底にあるからこそのである。そうでなければ、不安で、いろいろとお産の状況を考えて心配してしまうため、「何も頭にちらつか」せず傍にいることはできないのである。「何も頭にちらつか」せないからこそ、存在感を出さず、邪魔せずに、空気みたいな存在として傍にすることができるのである。

存在感を消して、傍にいるということは、そのお母さんの産む力をD助産師が信じ、お母さんもまた、その自分の力を信じる。そして「身体を良くしてくれたD助産師のことをお母さんが信じるという、お互いが信じ合う関係の中だからこそ、生まれてくるケアなのである。そのような信頼関係があるからこそ、存在感を消して、ただ傍にいるという“何もしなくても大丈夫”という「猫のように隅っこにいる」ケアが生まれるのである。D助産師は「うまく産まさはる」のではなく、「うまく産まれる」と語っている。これは、D助産師が「産ませる」のではなく、お母さんにはがんばって増やした産む力があるので、“何もしなくても”お母さんと赤ちゃん自身の方で「うまく産まれる」ということなのである。だからこそ、D助産師は「猫のように隅っこにいる」という「邪魔をしない」というケアへと導かれていくのである。お母さんとD助産師が、お互いを信じ合うという根底のもとに成り立つ「猫のように隅っこにいる」というケアは、積極的にD助産師が働きかけて行っていくのではなく、産婦側から促

されて、産婦の状況に合わせて行っているケアだと言える。

IV. 考察

1. 人や状況に導かれ、促される

D助産師のケアは、人やある状況に促されてケアが行われたり、D助産師がある状況に導かれてケアを行っていた。

D助産師は、赤ちゃんの思い、赤ちゃんの反応や動きを感じ、赤ちゃんが自分で逆子から治っていきこうとするその感覚に導かれて、逆子のケアを行っていた。また、助産師が「うまく産ます」のではなく、妊娠中に健康な身体を作り上げたお母さんの産む力と赤ちゃんの産まれる力で「うまく産まれる」という思いでお産をしており、そういった思いが、D助産師を、「猫のように隅っこにいる」という「邪魔をしない」ケアへと導いていた。

Merleau-Ponty (1967a) は、「私が自分の左手で自分の右手に触れた場合」、「私は触れられている手を、すぐつぎには触れる手となるであろうその同じものとして認めることができる」と述べている。これは、私が触れられている右手はある瞬間に触れる手となり得る、そのような反転可能性について述べた記述である。ここで記述してきた促されるというケアは、ケアを提供する、あるいは助産師としてある実践をするといった能動的に関わるという意味を一方で持ちながら、その能動的な働きかけは関わっていきこうとするその手前で、向こう側から促されているような受動的な感覚のもとで成り立つという構造をもっていた。主体でもあり、客体でもあるこの両義的な身体のあり方は、人やある状況に促されたり、ある状況に導かれて行われる助産院のケアのあり方を表していた。助産師からの一方的ではないこの関わりは、「看護の究極の目標である、他者がこうありたいと思っているあり方でいられるようその人に力を与えるような関係（ベナー・ルーベル 1999）」を生み出すことに繋がっていると思われる。

D助産師のケアは、助産師からの一方的な営みではなく、人やある状況に促されたり、D助産師の過去の経験において生み出された思いが、D助産師を

あるケアへと導いていた。このように、赤ちゃんやお母さんの存在がケアを生み出しているといった実践のあり方は、D助産師のケアの特徴と言える。

2. 身体で感じる

D助産師はお母さんの状態、赤ちゃんの状態やメッセージを、D助産師が身体で感じて知覚されたものに促され、ケアが導かれていた。

D助産師は、赤ちゃんの思い、反応や動きを感じ逆子のケアを行っていた。また、健康なお母さんの身体から「びんびん」の健康状態を感じており、血や尿の検査データ、血圧や体温などの数値からだけではなく、身体に触れることで健康状態を感じていた。

鷺田 (2004) によれば、「時代の枠組み、科学の枠組みがあって、みえているのにその枠組みのせいで、ある見方しかできなくなっている。それを取りはずして、みえているものを、はじめてみえるようにする」ことが現象学である。医療技術・医療機器の中でお産をすることにより、科学的思考の中でケアをすることになっていく。そのような科学的思考の枠組みからでは、お母さんの状態や、赤ちゃんが伝えようとしている思いを覆い隠してしまい感じる事ができない。しかし、D助産師は、そういった枠組みを取りはずしているから、お母さんの状態や赤ちゃんの思いを身体で感じる事ができたのである。

Merleau-Ponty (1967a) によれば、「世界というものは、それについて私のなし得る一切の分析に先立ってすでにそこに在るもので」あり、「身体をとおして世界に在るかぎり、また、われわれが世界を自分の身体でもって知覚する (Merleau-Ponty 1967b)。」そして、「知覚されているものは理解されているものの原型 (Merleau-Ponty 1979)」である。

これまで、身体で感じるということを書いてきたが、これは、分析する前に、もうすでにある状況を身体がすでに反映してしまっている、身体に表れているということである。分析する手前で、身体で知覚するという自体は、分析しなくてもそのようにしか見えないということであり、知覚自体が判断を含み持っているのである。D助産師が赤ちゃんの思いが分かるようになったのは、10年越えてから

であり、赤ちゃんが伝えてくる思いを知ろうとするD助産師の志向性によって、まだお腹の中にいる赤ちゃんと関わることで、赤ちゃんの思いを感じることが出来たのであった。そのような経験を通して、D助産師はお母さんのお腹に触れることで、赤ちゃんが「嬉しい」「生命力にあふれる」といった赤ちゃんの思いや状態を感じている。これはD助産師が分析する前にもうすでにD助産師の手に赤ちゃんの思いや状態が表れているということである。D助産師が身体で感じることで営まれてきた実践は、一切の分析や解釈に先立って、ある状況をすでに反映している身体が知覚したものによる実践といえる。「科学は知覚された世界と同一の存在意義をもってはいない (Merleau-Ponty 1967a)」ということから、身体で感じるということは、そのような科学が構築する客観的世界からお母さんと赤ちゃんを見るのではなく、世界をまず把握する身体が知覚したものから、お母さんと赤ちゃんを見るということなのである。そういった実践のあり方は、お母さんと赤ちゃんの生きられた世界に関わることができるのである。生きられた世界に関わり、お母さんと赤ちゃんを知ること、助産師とお母さんと赤ちゃんの信頼が生まれ、関係は深まっていくのである。そして、その信頼をもとにしてケアが導かれていくのである。

こういったお母さんの状態、赤ちゃんの状態や思いを助産師が身体から感じることで営まれるといったケアのあり方は、D助産師のケアの特徴と言える。

3. 経験から知が産みだされる

D助産師は赤ちゃんの思いを感じたのは10年越えてからであった。初めは分からなかったが、手につけるように頑張ってみるといった10年間の経験において、赤ちゃんの思いを感じることができていった。D助産師の手から赤ちゃんの思いや健康状態が分かることで、D助産師が行っている逆子のケアが生み出されたのである。また、D助産師は妊娠中の管理がきちんとできていると、助産師が“何もしなくても”お母さんと赤ちゃん自身の力でうまく産まれるといった経験をすることで、お産中は、「猫のように隅っこにいる」という「邪魔をしない」ケアが生み出されたのである。

D助産師のケアは、D助産師の経験の更新の中から生み出されており、その経験の中から生まれたケアは、日々のケアの中にさらに編み込まれてそのつど更新されていく。そういったケアのあり方は、D助産師の実践を支えており、D助産師のケアの特徴と言える。

V. 看護実践への示唆

西村(2001)は、「こうした経験の語り、そして細やかな記述は、読み手との対話を通して解釈され、新たな意味として捉え直され、経験に織り込まれていく。つまり、記述された経験は、その明解な内容からだけでなく、読んだことを理解する解釈のプロセスを通して学ばれるのであり、さらにこのプロセスを介して、私たちはこうした経験を自己の経験として生きるのである」と述べている。本研究で行った記述を通して、病院で働く助産師が、書かれた記述を手がかりにして助産という実践、とりわけ自身自身の実践を新たな意味として捉え直し、何かを感じ、病院でのケアを問い直す契機になればと考える。

また、問い直して行われるケアが、病院のシステムの中で営まれることにより、病院での実践として経験の中に編み込まれて行く。そして経験の更新、捉え直しからケアが生まれ、また、そのケアが日々の実践においてそのつど更新されることで、科学的根拠を重要視した実践のケアではなく、助産院のケアとはまた違った形で、妊婦・産婦・褥婦と深い関係を持ち、一人の人を観て行う、ケアが繰り広げられるのではないかと考える。

VI. 研究の限界と課題

本研究は一人の開業助産師の経験からケアの特徴を導き出したが、一人一人助産師の経験は違い、そこから導き出されるケアもさまざまである。今後できるだけ多くの開業助産師の経験からケアの特徴を導き出し、多くの開業助産師の経験の記述を通して自分自身のケアを問い直し、より良いケアを多くの助産師が行えればと考える。

Ⅶ. 結論

開業助産師の経験から以下の3つのケアの特徴が導き出された。

1. 助産師からの一方的な営みではなく、人やある状況に促されてケアが行われたり、助産師がある状況に導かれてケアを行っていた。
2. お母さんの状態、赤ちゃんの状態や思いを助産師が身体から感じることでケアが営まれていた。
3. 開業助産師のケアは経験の更新の中から産み出されており、その経験の中から生まれたケアは、日々のケアの中にさらに編み込まれてそのつど更新されていた。

謝辞

本研究に協力して下さり、お忙しい中インタビューを快く引き受けてくださったD助産師に心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます。本稿をまとめあげる過程で、現象学に関してご指導下さいました首都東京大学の西村ユミ教授、また、立命館大学大学院の村本邦子教授をはじめ、研究の遂行にあたり、貴重なご助言をくださいました先生方に感謝いたします。

引用文献

D.F. ポーリット, C.T. ベック (2010) 近藤潤子監訳 (2010). 看護研究 原理と方法. 第2版 医学書院 pp259

- ぐるーぷ・きりん (1997). 私たちのお産からあなたのお産へ. メディカ出版. pp 85-222.
- 長谷川文, 村上明美 (2005). 出産する女性が満足できるお産. 母性衛生, 45 (4), 489-495.
- 伊賀みどり (2004). 婦人雑誌にみる出産方法および出産観の変容「主婦之友」創刊号から1960年代までを題材に. 大阪大学日本学報, 23 (3), 89-113.
- Merleau-Ponty, M (1967a). 竹内芳郎, 小木貞孝訳 (1967). 知覚の現象学Ⅰ. みすず書房 pp1, 3, 4, 6, 165.
- Merleau-Ponty, M (1967b). 竹内芳郎, 木田元, 宮本忠雄訳 (1967). 知覚の現象学Ⅱ. みすず書房 pp8.
- Merleau-Ponty, M (1979). 滝浦静雄, 木田元訳 (1979). 世界の散文. みすず書 pp146.
- 三砂ちづる, 竹原健二 (2009). いいお産とはどのような体験か. 助産雑誌, 63 (1), 22-31.
- 毛利多恵子 (2007). 助産所における安全性と快適性 病院群との比較分析. 日本助産学会誌, 20 (3), 80-81.
- 西村ユミ (2001). 語りかける身体—看護ケアの現象学. ゆみる出版 pp220.
- 西村ユミ (2009). 第5回臨床実践の現象学研究会資料.
- パトリシア ベナー, ジュディス ルーベル (1999). 難波卓志訳 (1999). ベナー/ルーベル 現象学的人間論と看護. 医学書院 pp 56.
- 志村千鶴子 (2005). 出産前後での妊産婦の首尾一貫感覚の変化と出産の満足感の関連—出産施設別での比較—. 日本助産学会誌, 18 (3), 186-187.
- 竹原健二, 野口真貴子, 嶋根卓也, 三砂ちづる (2008). 助産所と産院における出産体験に関する量的研究. 母性衛生, 49 (2), 275-285.
- 竹原健二, 野口真貴子, 嶋根卓也, 三砂ちづる (2009). 出産体験の決定因子. 母性衛生, 50 (2), 360-371.
- 鷺田清一 (2004). 看護学と哲学をつなぐもの. 看護研究, 37 (5), 42.

(2012. 11. 10 受稿) (2013. 4. 26 受理)
(ホームページ掲載 2013年5月)